

## 日本で一番小さな町だった赤岡町

高知県高知市から東へ約二〇km(車で約三〇分)、高知空港から約四km(車で約五分)東に位置する旧赤岡町(現香南市赤岡町)。面積はわずか一・六四<sup>km</sup>で、平成一七年一月三日までは、全国で二番目に小さな町でした。翌日には、それまで一番小さな町だった長崎県高島町が長崎市に合併したため、赤岡町は全国で一番小さな町になりました。

当時の人口は約三千四百人、高齢人口の割合は約三割でしたが、「うちの町の年寄りには元氣!」と自慢するほどプラス思考の人が多く、文化的熱度の高さを感じさせられる町でもありました。「このことは、かつて赤岡が幕末の頃より、高知市に次ぐ商都として繁栄していた歴史ある商人の町だったことも影響しているのかもかもしれません。」

全国で一番小さな町になったことで、まちの有志は、他の市町村は赤岡いくつつ分か?という遊び心から、「一・六四<sup>km</sup> = 1ak(アーカー)」という原単位を考え出しました。高知県内の市町村をakで表す地図を完成し、「さあこれから全国の市町村をakで!」と動き出した矢先の

# 赤岡のまつりと空間資源の再発見

畠中 洋行 *Written by Yoko Hatakenaka*

平成一八年三月一日に、五つの町村が合併して香南市になったため、この面白い企みははかなくも頓挫してしまいました。

## まつり好きの赤岡 赤岡の代表的な 三つの祭りを紹介

### 「どろめ祭り」

毎年四月の最終日曜日、太平洋を眼前にした赤岡町の浜辺で、地引き網でとれたのどろメ(マイワシ・ウルメなどの稚魚)を肴に数千人が、おきやく(宴会のこと)をします。メインイベントは、太平洋を背景にした舞台の上で、真う赤な大杯に注がれた清酒を、男性は一升、女性は一合をぐいぐい飲み、飲み干す時間、「飲みつぶり」を競います。浜辺に座った目線の先に太平洋をみることができるといふ空間の演出が素晴らしく、高知県内外から大勢の人が訪れます。

### 「絵金祭り」

赤岡には土佐藩時代の絵師「えきん絵金」弘瀬金藏の通称「えきんくわ」が描いた歌舞伎の屏風絵三三点が保存されています。現在、屏風絵は絵金蔵(後述)に収蔵されていますが、一年の内、赤岡町須留田八幡宮の宵宮の時と、「絵金祭り」の時だけ、商店街の軒先にその姿を現します。この屏風絵は元々、まちの旦那衆が須留田八幡宮



絵金祭り



冬の夏祭り

の大祭に奉納するために絵金に描かせたもので、宵宮の日に商家の軒先や土間に広げられるようになったのは江戸時代末期からのことです。七月第三週の土曜と日曜に開催されている「絵金祭り」は、商店街の発展を願って昭和五二年から始まりました。二三点の屏風絵すべてが夜店で賑わう通りに出そろいます。また、宵宮は毎年七月一四日と一五日に行われ、二三点ある屏風絵のうち一七点が町家の軒先や土間に並びます。この日は、街灯や自動販売機の灯りはすべて消され、ロソク一本の灯りで往事を偲ばせる静かな風情の中で屏風絵が鑑賞できます。

❖❖ 冬の夏祭り ❖❖

平成七年に始まった祭りで、二月の第一土

たことに、路上に畳が敷かれ、「コタツやちやぶ台」が出現するのです。家族連れや若者たちが食べ物や飲み物を手に、「コタツを囲みながら」こやかに談笑している光景がそこに見受けられます。人気のカフェなどによる飲食物の販売のほか、クラフト作家が作品を販売する「作家通り」が出現したり、祭りの日のみ使用可能な「一両小判」(一〇〇円相当の地域通貨)の両替商を地元銀行が務めたりするといった楽しいしくみも生まれています。冬の夏祭りは、毎年絶えず進化しています。でも変わらないのは、「今あるモノ・使われなくなったモノに目を向け、価値を見だし、再生の道を探りながら町を元気にしていこう」という基本的な考え方です。

曜と日曜に開催されています。冬なのに、夏祭りの賑わいをこの町に取り戻そうという想いを込めたこの祭り。「冬の夏祭り」というネーミングが祭りの面白さを倍増させています。

祭りの日には歩行者天国になります。驚いたことには

まちづくりのキーワードは  
地域資源の再生

まちづくりに取り組むようになった背景

昭和四八年に新国道が開通した頃から徐々に衰退し始めた赤岡町。さらに、大型量販店の進出により致命的なダメージを受け、まちの人たちには危機感が募っていました。そうした中、まちを元気にしようと取り組むグループが生まれてきました。

平成五年に、絵金の屏風絵に描かれている歌舞伎を自ら演じてみようとして「土佐絵金歌舞伎伝承会」が誕生し、「絵金祭り」で歌舞伎の上演を行うようになりました。平成七年には、地元主婦を中心に産品開発グループ「やつゆ会・金木犀」が発足。同年の一月には、商店街のメンバーが中心となり、「冬の夏祭り」実行委員会がつくられ、こうしたグループが活動を行うことにより、ま



旭湯の番台でプレゼンテーション



「犬も歩けば赤岡町」

ちに少しずつ活気が生まれてきました。しかし、この時点では個別の活動でしかありませんでした。平成九年に、前記三つのグループを中心に商工会・行政・議員も加わり、皆が一堂に会して、「赤岡をハイジーンアップさせよう!」という話し合いが始まりました。

### 赤岡のまちづくりがめざす方向性

一ヶ月半に一回のペースでワークショップを行う中から、「まちに昔からあるモノ・ヒト・コトの魅力的な資源を再生する、そんなまちをめざそう!」という方向性が見えてきました。

まちの魅力を体感するために、藤森照信さん、赤瀬川原平さんから路上観察学会のメンバーを団長にしての、「あかおか探偵団」を行いました。さらには、「親子あかおか探偵団」も、こうした取り組みを続ける中から、赤岡のまちが有している魅力が再認識され、これらを次代に引き継いでいくことの大切さに気づき、いくつかの具体的なプロジェクトが動き出しました。

### 銭湯「旭湯」の保存プロジェクト

二つ目のプロジェクトは、ワークショップの会場となっていた銭湯「旭湯」を保存しようというプロジェクトです。銭湯は既に廃業していましたが、まちの人にとっては懐かしい場所。しかし、所

有者が他所に引越すことになり、売却されることに。何とか残せないものか。

「単に募金や寄付金を集めるのも面白くない、赤岡らしくないね」という赤岡の人たち。そこで考えついたのが、お金を出してくれる人にも赤岡ファンになってもらえるような情報発信も兼ねた方法にしようということで、「犬も歩けば赤岡町」という本を発行することになりました。

これまでに取り組んできた「あかおか探偵団」「親子あかおか探偵団」の内容を紙上再録して、「この本売れたら風呂屋が残る!」といふふれこみで全国書店での販売を展開することになりました。結局、建物の購入には至りませんでした。本が売れたお金で解体した「旭湯」のファサードを、平成一九年七月に完成した芝居小屋「弁天座」の離れの棟に再生することができました。

### 「米の蔵から文化の蔵へ」再生プロジェクト

二つ目は、農協が米の貯蔵庫として使っていた小規模の蔵を、文化の蔵として再生しようというプロジェクトです。前述したように、赤岡には絵金が描いた屏風絵が「三点残っています。これまでは、各所有者の家で保管されてきました。しかし、劣化が進んだり、火災や地震への対応など、個人の家での保管では限界がありました。そこで、まちの大切な宝物でもある屏風絵を、安心して保管できるような収蔵庫があり、また、絵金に関する情報を提供できる機能を持ち、さらに、一〇〇名規模の「コンサート」などの催しにも使えるような蔵に再生しよう」と、皆で設計ワークショップを重ね、平成一七年に絵金蔵としてオープンしました。



かつての旭湯



弁天座の離れの棟に再生した旭湯のファサード



再生後の絵金蔵



弁天座の内部

## 芝居小屋「弁天座」再生プロジェクト

三つ目は、芝居小屋再生プロジェクトです。絵金の描いた歌舞伎芝居を演じる活動を行ってきた土佐絵金歌舞伎伝承会が、「絵金祭り」の時に自力で仮設小屋を設営、演じてきて既に一五年。平成一一年には、フランス公演を実現し、平成二二年にはサントリー地域文化賞を受賞するまでになりました。そこで、常設の芝居小屋として、かつて赤岡のまちを賑わしていた「弁天座」を再建することになり、設計ワークショップを重ねて、平成一九年七月にオープンしました。

絵金歌舞伎はもとより、高知県内の地芝居が一堂に会しての催しや高知在住の外国人たちによるアカデミー賞風映像祭など、多彩で面白い取り組みが進められています。

### 町家再生プロジェクト

絵金蔵、弁天座は、ともに町が建設し、民間組織が指定管理者となつてアイデア豊かな面白い運営を行うという、公設民

営での資源再生の取り組みです。こうした動きに呼応するように、まちの人たちの手で空き家になっていた町家を再生して、喫茶処、雑貨屋、飲食処を営む動きも出てきています。

例えば、高知工科大学の学生が、築二〇〇年の建物の一角に、古さと新しさを併せ持つ再生喫茶道(タオ)を開店し、卒業した現在も営業を続けています。また、町家を借り上げ、ちよと休息する場として活用する「町家キャンプ」が出現したり、古布や使われなくなつたさまざまな雑貨類をもとに、古くて新しい雑貨へと再生する「おっこつ屋」(奇想天外な雑貨商品をおおげさに売る店)を開店したりしました。

## ヒトの魅力が空間資源の魅力を引き出す

絵金蔵や弁天座はパブリックスペースですが、行政と町の人たちが協働してまちづくりのプロセスを経ることにより、さらには、指定管理者である運営組織のアイデアによつて、市民共有の魅力的な資源として有効に活用されてきています。



左が「道(タオ)」右が「おっこつ屋」

また、「絵金祭り」の時には通り沿いの町家の軒先に屏風絵が置かれたり、「冬の夏祭り」では、歩行者天国となつた路上に畳やコタツが置かれたりするという行為によつて、道路というパブリックスペースが、市民共有の魅力的な資源に変貌します。これらの祭りは、訪れた人々を道路というパブリックな空間から町家というプライベートな空間に誘い入れるしくみとツールを有していると言えます。

赤岡の人たちは、地域資源の再生をキーワードにまちづくりを進めてきましたが、赤岡のヒトの魅力があつてこそ、空間資源をより魅力的なものにしていると確信しています。

■ 畠中 洋行(はたけなか・ようこう)

特定非営利活動法人NPO高知市民会議事務局長。一九五一年高知県生まれ。七九年(株)若竹まちづくり研究所を設立。二〇〇六年に退職し、現在に至る。人と人とのつながりを創り出す魅力的な活動を広げている。